

<真っ白なおしろい>で装った姿が遠目にも鮮やかなのがハンゲショウです。穂状の花のすぐ下にある葉が一枚、しかも表だけが真っ白になっています。こんなことから、舞子さんがおしろいを塗っているさ中にふと用事を思い出しそのまま立ち上がった様を思ったりします。名前の謂われとしてはこの“半化粧”が何となくロマンティックでいいと思うのですが、旧暦の“半夏生”の候に咲くからだとされています。ところで、



<ハンゲショウとコウホネ、ヒシとヒルムシロなど>

真っ白な葉は花卉のように虫を花に引き寄せる手助けをしているようで、花が終わると役目を終えて緑に戻っていきます。

<半夏生>旧暦には四季、二十四節気、そして約5日ごとの七十二候(シチジュウニコウ)があります。その一つが半夏生で、夏至から約11日目にあたり今年7月2日になります。この号の翌日です。昔の人たちは自然の姿が約5日ほどで移り変わっていくと感じたのですから、その感性たるや凄いですね。

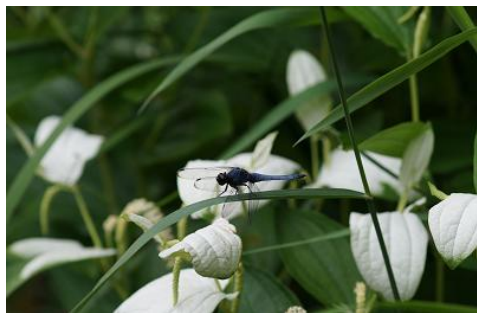
<ハンゲショウ>→

<とんぼのメガネ>という童謡はトンボを相手に野原や川辺を元気に駆け回る童たちの姿や幼いころの自分たちを思い起こさせます。その歌詞ではトンボたちは“水いろめがね”や“ぴかぴかめがね”や”赤色めがね”を掛けていますね。枯れ竹の先で一休みするショウジョウトンボ(♂)はまさに”赤色めがね”を着用！そして尾の先まで真っ赤です。“水いろめがね”というと真っ先にギンヤンマなのでしょうね。“ぴかぴかめがね”を掛けているのはヤブヤンマかなと思うのですがビオトープではお目にかかっています。



<ショウジョウトンボ>

ハンゲショウの白を背景にガマの葉で休んでいるオオシオカラトンボ(♂)が掛けているのはサングラスですね。まだ写真に収まっていないのですが、このトンボの雌は胴が鮮やかな虎模様をしていて雌雄のコントラストが際立ちます。



<オオシオカラトンボ>

<ホトトギス>のよく徹る鳴き声がビオトープにも聴こえてきます。1号館の前に植わっているメタセコイアの天辺のあたりにも来ています。一方、ビオトープの斜面の何ヶ所かに植わっているホトトギスの花はまだですが、ベニシジミを休ませ



<ベニシジミとホトトギス>

ている姿もいいですね。数は少ないですが他のシジミチョウやシロチョウ、アゲハチョウも舞っています。(文と写真：松本正勝)

